

# 予防接種は秋月黒田藩から始まった

富田英壽

秋月黒田藩の城下町「秋月」は、いま静かな佇まいを見せ、清らかな水と緑に恵まれ、春は桜、秋の紅葉と訪れる多くの人びとを癒してくれています。



この秋月から、私たちが日頃受けている、はしか、インフルエンザやジフテリアなどの予防接種が始まったのであります。秋月で始まったのは天然痘という病気の予防接種です。

今はこの予防接種「種痘」のお陰で、天然痘は全世界から絶滅させることができましたが、昔は疱瘡とか、痘瘡とか呼ばれていた大変恐ろしい病気でした。ある村に天然痘が発生すると、8割以上の人天然痘にかかり、その中の3割の患者が亡くなっていくという大変恐ろしいものでした。このように天然痘が流行すると、多くの子どもたちが亡くなっていきましたから、「痘瘡にかかったことがない子は、我が子と思うな」と言われるくらい、恐れられていたのです。

秋月地方でも江戸時代末期にこの病気が大流行し、多くの幼い子供たちがたくさん亡くなっていきました。このような大変恐

ろしい病気から幼い子供たちを救うためにどうにかならないかと思案していた人たちがいて、その解決に立ち向かったのです。その人たちとは秋月藩医緒方春朔、大庄屋天野甚左衛門や秋月藩主黒田長舒公であります。

秋月黒田藩は、天然痘の予防接種「種痘」を日本で初めて成功させた地として知られています。あの有名なジェンナーの牛痘種痘法発明の6年前に、この天然痘の予防接種・人痘種痘法を秋月で成功させたのは、秋月藩医緒方春朔、大庄屋天野甚左衛門と秋月藩主黒田長舒公の3偉人です。

上秋月の大庄屋天野甚左衛門の理解と協力を受け、彼の2児に種痘の実験台になってもらいました。それは春朔が実験台になってもらうように頼んだのではなく、かねてから種痘の話しを春朔から聞いていた天野甚左衛門が、自から進んで自分の2児を実験台に使うように春朔に申し出たのであります。



術がまだ未熟で、他人様の子に施すことは出来ぬと固辞する春朔に、「種痘を試しても応ずるか応じないかの違いだけでしょう、

反応すれば後々どれだけの人びとに役立つ  
でありましょうか」としきりに実施するよ  
うに固辞する春朔に奨めたと言います。春  
朔も道理のある話しであるのでとうとう承  
諾したと言います。

もしこの時、天野甚左衛門の理解と協力  
がなければ、春朔の種痘の成功は無かつた  
でありましょう。日本の予防接種は、秋月  
黒田藩で成功し、秋月から始まって全国に  
広まっていった訳です。

藩主黒田長舒公は、緒方春朔を藩医に取り  
立て春朔の種痘研究を支援し、成功した  
種痘を全国に広げる努力をしました。これ  
がわが国の天然痘撲滅の第一歩となり、そ  
してわが国の医療が「治療」から「予防」  
へと関心が移っていった歴史的契機となっ  
たのであります。その後、春朔は寛政2  
(1790)年から寛政8年までの7年間に、  
1000人以上の子供に種痘し、誤ったものは  
1人も無かつたそうです。

そして、種痘の効力について、「万物自然  
の働きがわが掌中にあると思えるなど、常  
識では考えられないことであつた。ある医  
書に『聖医は未だ病まざるを治す』とある  
のはこのことを言ったものであろうか」と  
春朔は大変驚いています。

こうして恐ろしい天然痘は、緒方春朔、  
天野甚左衛門や黒田長舒公の功績やジェ  
ンナーをはじめ多くの世界の医学者のお陰で、  
予防接種により世界から消滅させることが



できました。約30年前の1980年にWHO  
(世界保健機構)は、「世界天然痘根絶」を  
宣言しました。

私たちは、緒方春朔、天野甚左衛門や黒  
田長舒公の大いなる偉業のおかげで、毎日  
健やかに幸せに生きていると言っても過言  
ではありません。この大いなる偉業に心か  
ら感謝しなければなりません。

#### 参考文献：

富田英壽『種痘の祖・緒方春朔』西日本新  
聞社、2005年

富田英壽『天然痘予防に挑んだ秋月藩医・  
緒方春朔』海鳥社、2010年

